

小学校社会科における地域との関わりを見いだす授業づくり(第一年次)

—子どもたちが目的意識をもって追究する学習を通して—

長期研究員 松本 哲幸

《研究の要旨》

本研究は、子どもたちが見学や資料などを基に地域の現状から自分たちの問いを見だし、地域の人々と関わらう中で、よりよい地域づくりに参加しようとする態度を育むことを目指した。そこで、これまでの学習で関わってきた地域人材を活用し、問いの解決に向けて話を聞いたり、話し合ったりすることで、どうしたらよりよい生活ができるかを考えられるようにした。その結果、地域の現状を理解し、地域のために何かしたいという意欲を高め、自分たちにできることを思い描くことのできる子どもの姿が見られた。

I 研究の趣旨

次期小学校学習指導要領解説社会編では、「小学校の社会科は、〔中略〕公民としての資質・能力の基礎を育成することをねらいとしている」と述べられている。そのため、子どもたちが身近な社会的事象に関心をもち、人々が相互に関わりながら生活を営んでいることへの理解を深め、よりよい社会の形成に参画する資質・能力の基礎を身に付けられるようにする必要がある。

また、福島県教育委員会が策定した「福島県地域学校活性化推進構想」(2019年2月)では、地域の人間関係の希薄化が問題視される現代において、年代の違う人との接点を意図的に増やすことの必要性が述べられ、福島県内の全ての公立学校において地域連携担当教職員^{*1}が任命されることになった。これを受け、学校と地域が一体となって子どもたちを支援していく体制が構築されることとなる。

協力校のある広野町は、震災直後全町民が他の市町村に避難した。現在では、帰還率が88.2%(令和元年12月現在)と少しずつ住民が戻り、以前のようなコミュニティを取り戻しつつある。また、住民同士が集う機会が増えるなど、今後、子どもたちが地域と関わる機会も増えてくることが予想される。だからこそ、子どもたちが「地域を学びたい」「地域のためにこんなことをしたい」という必要感をもって地域と関われるようにすることが重要だと考える。

本研究では、子どもの目的意識を「地域と関わる必要感」とすることにした。広野町は、震災直後、商業や農業面などで多くの困難を抱え、現在でも厳しい状況が続いている。そこで、子どもたちが地域の商店街や米農家などと関わることで、地域の現状から、自分たちにできることを思い描くことができるような単元を構想したいと考えた。

^{*1} 学校と地域が連携・協働した取組の調整・連絡、情報収集にあたる教職員のこと

II 研究の概要

1 研究仮説

社会科の授業において、以下の手だてを講じれば、地域の現状から課題を見だし、地域人材と関わらう中で課題を解決し、地域のために自分ができることを思い描くことができる子どもを育むことができるであろう。

【視点1】地域連携担当教職員との連携を図った単元づくりの工夫

【視点2】社会的事象を基にした子どもの問いや考えの焦点化、共有化を図る授業づくりの工夫

2 研究の内容

(1) 【視点1】「単元づくりの工夫」について

子どもたちに地域と関わる必要感を生じさせるには、問いを解決させるために地域連携担当教職員を活用した地域素材の教材化が欠かせない。加えて、地域連携担当教職員の紹介により、子どもの課題に応じた地域人材と教師がつながることで、単元構想の中に子どもの問いや思いに沿った地域人材の活用を位置付けることが可能となる。その上で、単元の導入において、地域人材が行っている取組を意図的に提示する中で、子どもたちに「なぜこのようなことをやっているのか」という問いや「話を聞いてみたい」という思いをもたせる。これにより、子どもたちが地域人材と関わるためのきっかけをつくれるようにする。さらに、子どもたちが問いや思いを解決したいという必要感をもって、地域人材と関わって学ぶ楽しさや分かるおもしろさなど、学びの深まりを実感できるようにする。

(2) 【視点2】「授業づくりの工夫」について

① 地域の課題を自分事としてとらえる問いの焦点化

地域の現状を示す資料を複数提示し、比較させ、社会的事象のずれに気付かせることで、子どもたちに「なぜ」「どうして」という問いや思いをもたせる。ここから子どもたちが地域の課題を自分事としてとらえる問いへと焦点化し、課題解決したいという必要感をもたせる。また、課題追究の場面では、この必要感を基に、課題について調査したり資料を比較したり、自分の考えや思いを話し合うことができるようにする。その中で地域の現状を共有・理解し、

地域のために自分にできることは何かという関心、意欲を高められるようにする。

② 「振り返りシート」による思いの可視化

地域人材から学んだことを意識できるように「振り返りシート」を活用する。毎時間、分かったことや考えたことなどの振り返りを記述し、累積することで、記述内容から地域への思いを見取ることができるようにする。また、振り返りシートを基に友達と交流することで、地域をよりよくしたいという考えや思いの深まりを実感させていく。

3 研究の実際

(1) 授業実践単元について

対象学年	第3学年 23名 (1学級)
授業実践Ⅰ	「店ではたらく人」(13時間)
授業実践Ⅱ	「農家の仕事」(12時間)

(2) 実践Ⅰ 「店ではたらく人」

① 【視点1】の実際

手だて1 地域人材の活用を図った単元づくり

学級で「どうすればたくさんの人に買い物に来てもらえるのか」という問いを共有し、子どもの思いに沿って解決できるようにした。そのため、教師は地域連携担当教職員に相談し、地域のために尽力している商店街の方や商店街を支える商工会の方との関わりをもった。次に、店長から販売の工夫や思いを聞き、それを基に、単元構想に子どもの問いや思いに沿った地域人材との関わりを位置付けた。これにより、子どもたちが自分たちの問いや思いを地域人材と関わって解決することで、地域の現状を理解できるようにした(図1)。

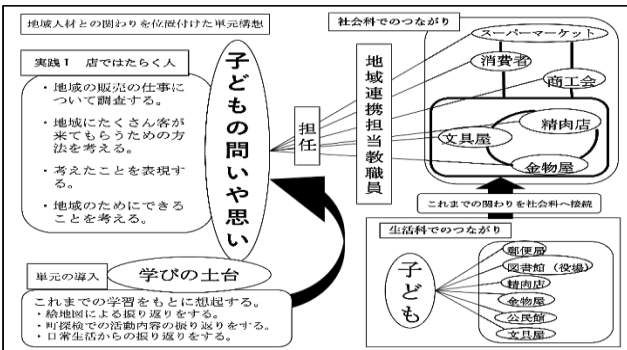


図1 子どもの問いや思いと地域人材をつなぐイメージ図

単元の導入において、今と昔の商店街の様子が分かる2枚の写真を提示し比較させた。これにより、にぎわいの変化に気付いた子どもたちは、「どうしてそうなったのか」という思いを基に、その理由を「知りたい」「調べたい」という学習意欲を高めた。その際、これまで関わった地域人材を想起させることで、「詳しく知るためには地域の人に聞く」という思いを再確認できた。この思いが地域と関わる必要感となった。さらに、地域連携担当教職員の紹介で、子どもたちは、商店街を盛り上げるために支援している商工会との関わりをもった。これにより、子どもたちは、地域人材との関わりを広げることができ、消費者のことを考

えた販売の工夫や商工会の役割について新たに知ることができた。結果として、地域の復興のために商店街の思いが関わり合って地域の生活を支えていることを理解した。同時に、「地域の商店街に買い物に行くようにしたい」と発言し、実際に家族と買い物に行くなど、地域に進んで関わろうとする子どもの姿が見られた。

② 【視点2】の実際

手だて1 地域課題を自分事として考える問いの焦点化

事前に行った買い物調べの結果を基に、順位を隠してランキング化して提示し、子どもたちにどの店で買い物をする人が多いのか予想させた。すると、大部分の子どもはスーパーマーケットに買い物に行く人が多いと予想した。結果、多くの家庭が地元や近隣のスーパーマーケットで買い物していることが明らかとなった(図2)。

順位	お店の名前	人数
1	イオン(佐野店)	22
2	マルト(仙崎店など)	12
3	コンビニ(セブンイレブン)	9
4	ヨークベニマル	5
5	イオンモール(いわき市南地区)	3
6	イオンモール(いわき市南地区)	2

図2 買い物調べの結果

そこで、「どうしてスーパーマーケットに買い物に行くのか」と教師が尋ねると、「安いから」「品数が多いから」という反応が返ってきた。さらに、「本当に安いのか」「本当に品数が多いのか」と問い返し、子どもの思考をゆさぶったことで、「直接調べないと分からない」と、買い物に来ている客を含めた地域の方と関わることに必要感をもつことができるようにした。



図3 調査の様子

一方、商店街で買い物をしている家庭は少ないことに驚く子どもの姿も見られた。そこで、地域に商店街は必要なのかとゆさぶることで、「なくては困る」「商店街の方々ががんばっている」「何か工夫していないのかな」と発言

する姿が見られた。子どもたちは、必要感をもって地域の商店街を調査することにより、各店で客を呼ぶための様々な工夫をしていることが分かった(図3)。一方で、「お店やお客さんが減ってしまった」という地域の現状を知ると、「なぜお客さんが減ったのか」「震災と関係があるのか」「商店街にお客さんが戻ってほしい」と考える姿が見られた。

続けて、「町にたくさんのお客さんがくるために市場みたいな店があればいいな」とある子どものつぶやきがかきつけとなり、「安い商品を広告で知らせる」「商品の便利さを伝える」などたくさんのお客さんに買い物してもらうための販売の工夫を出し合い、構想シートに表した(図4)。

ここから、「本当にその工夫でお客さんが来るのか」と問い返したことがきっかけとなり、もう一度全体で町にたくさんのお客さんが来るための方法を考えた。その中で、必要な商品が売っていないために隣接する市に買い物に行く家庭が多いことに気づき、「お客さんはどんな商

品がほしいのか」と消費者の立場に立って店に必要な商品について考えた。このようにして、地域を盛り上げたいという子どもの思いが表れた問いへと焦点化を図った。

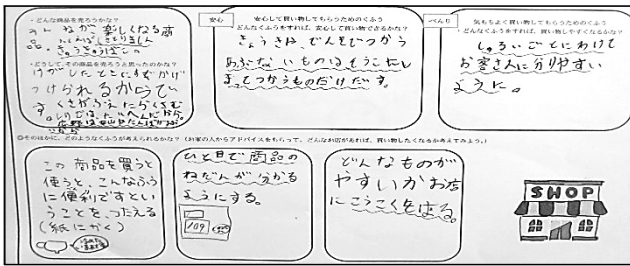


図4 町に必要な店の構想シート

(3) 実践Ⅱ 「農家の仕事」

① 【視点1】の実際

手だて1 地域人材の活用を図った単元づくり

広野町で特色のある米作りをしている農家の教材化を図るために、地域連携担当教職員から「双葉郡地域学校協働本部」の外部人材派遣事業を紹介してもらい、地域でアヒルを使って有機栽培による米作りをしている農家と出会わせた。その際、米作りにアヒルを使っている写真や動画を提供してもらった。それを子どもたちに提示し、「なぜ米作りにアヒルが必要なのか」「米作りとどんな関係があるのか」という問いを引き出し、自分の予想を立ててみた。すると、「自分の目で確かめたい」「答えを知りたい」という思いを解決するために農家との関わりが必要感をもった。これにより、子どもたちが主体的に地域人材と関わって学ぶ姿につながった。

② 【視点2】の実際

手だて1 地域課題を自分事として考える問いの焦点化

子どもたちは地域に水田が多くあることは知っていても、米作りをしている農家の数や作った米がどうなるかまでは知らない。そこで、子どもたちに「どのくらいの数の農家がいるのか」「作った米はどこで買えるのか」と質問し、予想を基に、地域の農家の数の変化や米の出荷先のデータをグラフにして提示した。これにより、「米を作る農家の数が減っている」「せっかく作ったのに家畜のえさや備蓄米となって食べてもらえない」などの現状を知り、「なぜ農家は減ったのか」「地域の米を多くの人に食べてほしい」と考える子どもの姿が見られた。その考えを基に地域のために自分のできることをノートに記述し、板書に分類・整理することで思いが可視化された。さらに、「町の米農家のこだわりや米のおいしさを知ってもらいたい」という思いが共有され、「たくさんの人に町の米を買ってもらうためにどうすればよいか」という問いへと焦点化を図った。

手だて2 地域との関わりを意識付ける振り返りシート

毎時間の「振り返りシート」から、「町の米を多くの人に食べてもらいたい」「町の農家の努力を知ってもらえるようにアピールしたい」と記述する子どもの姿が見られた(図

5)。それを学級全体で発表し、共有することで、「自分たちで考えたことを多くの人に伝えたい」と発言する子どもも現れ、単元を通して子どもたちが地域との関わりを意識して学ぶ見通しをもつことができた。さらに、子どもたちの振り返りシートには、「地域の米作りに参加してみたい」「地域の米を食べるようにする」

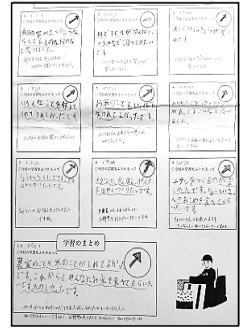


図5 振り返りシート

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

事前の意識調査では、13%の子どもが地域の方から話を聞くことが必要だと感じていなかった。しかし、地域の方と直接関わり、調べることで自分たちの問いを解決したり、人間関係の広がりや関わりを実感したりすることで、事後の意識調査では、すべての子どもが地域の方との関わりを肯定的にとらえることができた(図6)。

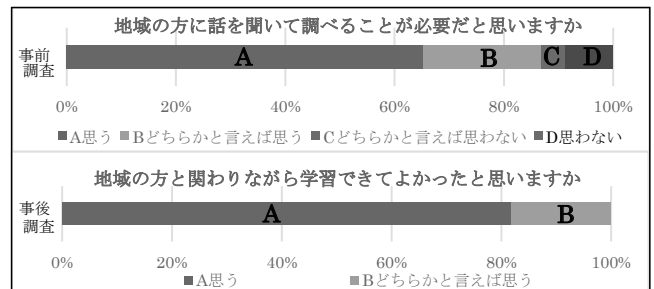


図6 意識調査の結果

このことから単元づくりにより地域の方と関わる必要感やよさを感じて追究したことで、地域の方との関わりを肯定的にとらえることができたと考えられる。また、地域の方と関わって学ぶことの必要感を高めて、地域人材に関わって学習することで、より深い学びにつながったと考える。

2 今後の課題

地域のために自分のできることを思い描く際に実生活とのつながりをより一層意識させることが必要だと感じた。そこで、自分なりに考えたことを実行することで、地域の方へ思いが伝わり、地域に何か変化が見えれば、自分の行動が地域のためになったと実感できると考える。今年度は、地域の実態をまだ十分に把握できず、地域連携担当教職員の提案により地域人材を活用していた。そこで、地域連携担当教職員と情報を共有し、地域人材の効果的な活用を提案していきたいと考える。その上で、子どもと地域とが互恵性のある伝え合いができるようにすることが大切となる。子どもたちが地域の将来を見通して自分なりの考えをもち、よりよい地域づくりに参加しようとする態度を育むことを目指したい。